

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2016年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科 言語科学専攻		
研究代表者 (2017年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	異文化コミュニケーション研究科 言語科学専攻 博士課程前期課程2年		加藤 充 印
指導教員	所属・職名		氏名
	異文化コミュニケーション研究科 教授		高橋 里美 印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題	英語ライティングへのフィードバックの効果：日本人大学生の冠詞の誤りと習得の関連		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	異文化コミュニケーション研究科 言語科学専攻 博士課程前期課程2年		加藤 充
研究期間	2016 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 109,011 円 / (採択金額) 200,000 円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究ではライティングにおける訂正フィードバック(written corrective feedback: 以下WCF)の効果的な方法について、特に日本人英語学習者を対象に、「冠詞」を「間接的」に訂正する効果を検証した。冠詞の適切な使用には名詞への理解が必要不可欠であるため、関連する名詞にも意識をさせるWCFを与え、相乗的に冠詞の習得が促進される可能性に焦点を当てた。また、多忙な教員への負担軽減となる間接的WCFの効果を検討することで、現職の英語教師への効果的な方法論の提示を目指した。さらに、WCFの効果を確認された被験者とそうではなかった被験者の特徴について、その差をもたらす要因を探索的に調査した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[英語ライティング] [訂正フィードバック] [冠詞]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**【研究課題】**

1. 冠詞に対して間接的 WCF を与える実験群、冠詞と名詞に対して間接的 WCF を与える実験群、WCF を与えない統制群との 3 群間に、冠詞の習得における違いがあるか。
2. 冠詞の誤りの種類によって、冠詞の習得に違いがあるか。もしそうならば、与える間接的 WCF で習得に違いがあるか。
3. 間接的 WCF の効果があった被験者は、その効果がなかった被験者と比較して、どのような特徴があるか。

【研究方法】

被験者: 都内の私立大学に通う 1 年生が参加した。サンプルサイズは G Power Ver.3.1 を用いた事前の検定力分析を用いて割り出した(水本, 2014)。本研究では混合計画の 2 要因の分散分析(Analysis of Variance: 以下 ANOVA)の交互作用を検討するため、有意水準($\alpha = .05$)、検定力($\beta = .2$)、効果量($F > .4$)を上記の条件に設定した。その結果、各グループで 13 名、3 グループ計で 39 名が必要であることが明らかとなった。これを参考にし、最終的に 41 名が本研究に参加した。日本語を母語としない者と 1 年以上の海外居住歴を有する者は本研究の対象から除外した。

材料: 文法性判断テスト(grammarality judgement test, 以下 GJT)と絵描写タスク(picture description task, 以下 PDT)を使用した。GJT について、時間制限はなく関連する 2 つの文を 1 問として、事前テストと事後テストで 25 問ずつ出題した。どちらか一方の文にのみ誤りが含まれ、その文は下線付きで示された。その内訳は冠詞の誤りに関する問題が 18 問、錯乱肢が 7 問である。被験者は下線部にある誤りを特定することが求められた。PDT に関して、被験者は連続した 4 つの絵を与えられ、それらの絵について描写をすることが求められた。事前 GJT と一緒に受ける事前 PDT と事後 GJT と一緒に受ける事後 PDT では、それぞれ 3 問ずつが出題された。そして PDT で得られたデータに対し WCF が与えられた。

手続き: 本研究は 5 週間で行われた。Week 1 で被験者ははじめに、事前 GJT と事前 PDT を受けた。この際の前 GJT の得点を参考にし、グループ間での得点に偏りがないよう被験者を以下の 3 つのグループのいずれかに振り分けた。Week 2-3 で冠詞に対する WCF を受けるグループ(G1)と冠詞と名詞に対する WCF を受けるグループ(G2)には WCF が、その一方で、WCF を受けないグループ(G3)については WCF を与えることなく、何も書き入れていない状態の回答が返却された。そして Week 4-5 で被験者は、事後 GJT と事後 PDT を受けた。その後、事前 GJT と事後 GJT の得点差を参考にして、WCF の効果が大きく見られた被験者と、そうでない被験者を実験群である G1 と G2 から選出し、秋学期にインタビュー調査を行った。このインタビュー調査では、石井(2015)が使用した WCF の選好性に関する質問紙をもとにした半構造的インタビューを行った。インタビュー調査の中では主に、WCF の選好性、PDT での回答、英語学習歴などに関する質問を行った。

【研究結果】

研究課題 1: 混合計画の 2 要因の ANOVA を行った結果、事前テストから事後テストにかけて G1 と G2 で有意な得点の上昇が確認された。しかし事後テストにおける 3 群間の得点を比較した結果、G2 と G3 にのみ有意な得点の差が認められ、G1 と G3 の間では得点差が有意ではなかった。つまり WCF の大きな効果が G2 では確認されたが、G1 では中程度の効果のみ確認された。

研究課題 2: 被験者が起こした冠詞のエラーを見ると、WCF を受ける前は先行研究で指摘されている傾向と似たエラーが見られた。その一方で、WCF を受けた後では特に定冠詞 the に関するエラーの頻度が減少傾向にあった。しかしマクネマー検定の結果、エラーを起こした被験者の比率に有意な減少傾向は確認できず、1 人あたりのエラーの頻度が減少したことが明らかになった。

研究課題 3: インタビュー調査を通じ、WCF の効果があった被験者がその効果がなかった被験者と比較して(1)本研究で与えられた WCF を確認したこと、(2)正しい答えを自分で考えたこと、(3)教師の指摘は役に立つと思っていること、の 3 つが特徴として見られた。しかし WCF の選好性、特に直接性と焦点化の有無は WCF の効果に影響を与えていないようであった。

研究成果の概要 つづき

【考察】

本研究からは、関連し合う文法項目を合わせて指導することでその両方を効率よく指導でき、また間接的 WCF のような学習者のライティングの訂正を短時間でできる方法でも文法指導として効率的に作用する可能性が示された。故に冠詞の指導を考えた際、ライティングを通して冠詞を実際に使用する機会を与え、エラーが起きた際は WCF を与える対象を冠詞と名詞に焦点化することで注意を向けやすくなり、対象項目である冠詞を操作する訓練につなげることができるだろう。しかし正答を書き与えることや、なぜエラーであるかの説明を書き加えることも時と場合によっては必要であり、間接的 WCF が唯一無二の方法であると提言しているわけではない。それぞれの学習者の習熟度や WCF に対する態度などを勘案し、必要に応じて間接的 WCF も効果的な指導方法として選択することは、学習者の自ら学習する姿勢を育むと同時に、教員の負担軽減にもつながると言えるだろう。

展望としてはまず、被験者の多様化が挙げられる。日本人大学生を対象として本研究は行われたが、習熟度がより低い学生や高校生などを対象とすることで、冠詞に対する間接的 WCF の有効性がどの程度の範囲まで認められるかについて、適性処遇交互作用(apptitude treatment interaction: ATI)といった手法を用いてより詳細に検討していく必要があるだろう。また冠詞の使用のみならず、ライティングのプロセスそのもの自体に WCF がどのように作用するかを一考する価値はあるだろう。学習者のライティングを WCF が与えられる対象としてだけでなく、そのライティングが完成するまでにどのようなプロセスを経てきたのかを調べることは、学習者の冠詞の処理や使用をより深く理解するために有効であると考えられる。パソコンを用いたライティングであれば、キーを打ったログを記録できるソフトウェアを運用することで、学習者の思考を分析する 1 つの手段とすることが可能となる。今後はこうした手法を用いて、学習者のプロセスにも着目した研究を進めていく必要があると考えられる。

参考文献

- 石井雄隆 (2015) . 「ライティング・フィードバックにおける学習者の選好に関する追行研究」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』 22(2), 117-127.
- 水本篤 (2014, 2 月) . 「量的データの分析・報告で気をつけたいこと」 外国語教育メディア学会中部支部外国語教育研究基礎研究部会第 1 回年次例会. 名古屋大学.

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

加藤充 (2017) .「英語ライティングへの訂正フィードバックの効果 - 異なる焦点化の比較を通して - 」『言語教師教育』 4(1),119-132.

② 図書

なし

③ シンポジウム・公開講演会等の開催

なし

④ その他

加藤充 (2017年2月12日) .「英語ライティングへの訂正フィードバックの効果 - 日本人大学生の冠詞の誤りと習得の関連 - 」関西英語教育学会第20回卒論・修論研究発表セミナー. 関西国際大学尼崎キャンパス.